



## 問わず語りの 人間力原論

高見大介

単一のプロフェッショナルのみでは乗り切れない。さまざまな人々が地域の子育てに参画し、多分野の知見を集約しなければ、子どもの夏休みの重要な学びと安全は守れない。

だからこそ今、多様な人々が地域の青少年教育に参画し、建設的な議論をしてほしいし、青少年団体は多くの子育て仲間を必要としてほしい。新時代に守るべきものを守るための学際的な知識と経験のネットワークが必要なのだ。

かつて動物学者のエドワード・モースは、明治時代の日本の路地裏にあった、年長者が年少者の面倒をみて、社会で役立つ力を育む学びの自発的コミュニティを見て、「日本は子どもたちの天国だ」と評した(エドワードモース著「日本その日その日」=講談社学術文庫)。これこそ私たちの一番の魅力的な文化であったと考えると、混沌とした現在に一筋の光を見た気になるのは私だけだろうか。そんなはずはない。そんなことを、吉田拓郎の「夏休み」を聞きながら考えている。

---

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。39歳。

## 夏休み

「外に出られない子どもたちの気持ちわかりますか？ 外で遊ばせてあげたいんです」。今から9年前の夏、福島県南相馬市の仮設住宅を訪れた私に、小学生の母親が話し掛けてきた。私は比較的色白な子どもを横目に、何も言えず考え込んでしまった。

確かに子どもにとって、夏の海水浴や野外活動は大きな意味を持つ。未知の体験と発見、異なる他者との出会いと別れ、そして協働する体験ができる事は人間力を育む上で重要だし、何より楽しいのだ。そんな南相馬の母親の悲痛な叫びを思い出した。今現在、全国で同様の思いが沸き上がっているように感じたからだ。

今こそ地域のさまざまな大人が立ち上がる時だと思う。これまで、子どもの体験活動は地域の青少年教育団体が経験を駆使し、担ってきた。しかし、この混乱を隠せない現在は、